

＜今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ8章8-15節＞
慈善の業を勧めるパウロ。その深い理由をさらに追いましょう。

1 おさらい：「慈善の業」(4,6,7)＝「恵み」(1,9)。原語は同じ語。

貧しいエルサレム教会に募金を集めて持って行くことを勧めるパウロ。大事なことは、「慈善の業」(4,6,7)と訳されている原語は、本来は「恵み」(1,9)と訳される「カリス」という語だということです。すなわちパウロは、神の恵み(1)、主イエス・キリストの恵み(9)に感謝を覚える中で慈善の業(募金行為)を考えているのです(特に9節に注目)。

2 (10-11a) その慈善の業が中断していた？

コリントの教会の人々はこの慈善の業をいち早く取り組み始めたのに中断していたようです。パウロはそれを「やり遂げなさい」と勧めています。その理由として挙げていることを追いたいと思います。

3 (7) 頭でっかちの信仰で終わってはならない。

パウロは7節で、コリントの信仰者たちに、「あなたがたは信仰、言葉、知識、あらゆる熱心、私たちから受ける愛など、全ての点で豊かなのですから、慈善の業においても豊かな者になりなさい」と呼びかけています。神様から恵みを受けた者は、ただ神様に感謝するだけでなく、その恵みをさらに他者に持ち運んだ時に本当に豊かな者となるということです。パウロは9:6以下でその豊かさについて語っています。

4 (11b-12) 喜んで捧げられるものでいい。思いを受け入れて下さる神。

受洗準備の際に献金について上のようにお話しします。それと同じことは慈善の業(神の恵みに感謝してする業)にも言えます。それぞれが感謝をもって捧げられるものを集めて主の教会をたてて行くときに良き教会がちゃんとできていきますし、慈善の業もそのようにしてなしていけばいいし、なしていくべきものなのです。

5 (13-15) 主を持つゆとりこそ、信仰者と教会が持つゆとり！

「ゆとり」(14)と訳された語の原意は「余り、残り」です。パウロがここで語っていることは、保険会社は教会の互助制度から始まったといった具体的なことにもつながりますが、保険もその根底にある「主イエス・キリストによって知らされた神様を知ることから生まれて来るゆとり」から生まれたものであることを忘れると、損得だけで考えるものに成り果てます。本当に必要な物はわずかでいいのです。15節の人数に相